日本発達心理学会第24回大会発表論文集（2013年3月）

自閉症幼児の愛着行動と他者理解の発達連関についての検討

白上智恵
（神戸大学大学院　人間発達環境学研究科）

［問題・目的］

自閉症幼児は，愛着対象を形成することをきっかけに，他機能の発達が促されること（伊藤ら，1991；狗巻，2010 など）が指摘されてきた。他方で，愛着行動の質的変化を引き起こす認知的能力として，他者理解の発達が着目されている。この両者は互いに連関して質的に変化していくことが指摘とされている（別府，2001）。しかしこれらの連関のプロセスについて明確になっているとは言い難い。そこで，本研究では自閉症幼児の愛着行動と他者理解の発達連関について，関与的観察のエピソード記録より検討を行う。

［方法］

本研究では近畿圏内の療育センターに通う中度知的障害を伴う自閉症の 3 歳男児の 3 歳 6 カ月から 4 歳 2 カ月の事例を扱う。本児は，観察開始時の 3 歳 5 カ月時の新版 K 式発達検査の結果で，姿勢・運動　発達指数（以下 DQ）：42，認知・適応　DQ：51，言語・社会　DQ：27 ，全領域　DQ：46　DA：1 歳前期であった。筆者が，2011 年 6 月～2012 年 1 月まで，本児の所属するクラスの療育に週に 1～2 日，終日参加し，約 180 のエピソード記録と担任保育士からの聞き取りをおこなった。分析の指標としては，①愛着行動として接近‐維持行動（本児から接近する行動と，大人に対して接近維持を起こすよう求める行動を含む），②他者をどのような存在とみなしているのかを，「振る舞いとしての他者理解」（以下，他者理解）として接近‐維持行動時の本児の視線に着目した。

［結果・考察］

エピソード記録より分析指標に合致する，約 570 のエピソードカードに切り分け，分析指標①②の両方の観点で，それぞれの質的変化から時期区分を行った。その結果，Table1 に示す質的に異なる 6 期間が抽出できた。本事例においては，第二期に人への志向性が，場面／行為との随伴性の中で成立した。この場面/行為の随伴性に基づき，快の情動を引き起こす具体的行動の経験の積み重ねの中で，第三期には，場面/行為から相対的に「他者」が浮かび上がり，場面/行為を超えて，他者に要求行動を行う姿や，行為者を確認するように視線を向ける姿が出てきた。これは，行為者として他者を理解する段階に入った姿であると考えられた。行為者としての他者理解は，他者の行為の自分にとっての意味を理解することも可能にするため，第四期には，快の情動の引き起こしという具体的な行動を求めてではあるが，不安・不快な場面において特定の保育者を志向していく姿が出てきた。第四期以降，快の情動を引き起こし，また，不快の情動も共有しうる特定の相手として，相互交渉が密になる中で，第五期には，他者の意図を確認するかのように頻回に他者の顔や行動に視線を向けるようになってきた。これは，自他の個別性（木下，2008）への気づきから確認行動を行っている姿（狗巻，2006）であり，意図を有する主体として他者を理解する段階に入った姿であると考えられた。この結果より，先行研究の別府（2001）同様，愛着行動が質的に変化することと関連して他者理解も質的に変化することが明らかになった。その知見に加え，本研究では，①愛着行動と他者理解の質的変化は，その時期を異にして，互いに影響を及ぼしあう過程であること，②愛着行動の質的変化を発達的基盤として他者理解の質的変化があることが示唆された。

Table 1　愛着行動と他者理解の質的変化

時期	第一期	第二期	第三期	第四期	第五期	第六期
愛着行動		場面・行為の随伴性での志向性		不安・不快な場面での志向性		
他者理解			行為者としての他者理解		意図を有する主体としての他者理解	情動を有する主体としての他者理解
行動例		エプロンシアター遊びをしてくれた先生の背中にそっとはりついてにやりと笑う	手をつないだ相手を見上げて確認し，うつむいて，にやっと笑う	活動の切り替え時に特定の相手の背中にはりついて泣く	要求行動時に相手の顔を覗き込む	相手の心的状態を勘案したうえで要求行動を行う